説教20200816フィリピ3：12-21 167 509 21-88

「本国は天にあり」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

　今、日本ではお盆の季節を迎えましたが、今年は親兄弟姉妹たちと別れて過ごされた方も多かったのではないでしょうか。私も帰省することを控え、先週は図書館などで時を過ごしていました。そんな中で思ったのは、このように別々の処に置かれている、というのもいいものだなあということでした。それはパウロとフィリピの信徒たちが別々の処に置かれているのと同じことです。

別々の処に置かれつつ「主よ、私たちを祝福し、共に喜ぶ者として下さい、」と祈っておりました。そうすると、不思議なことに、成すべき事は知らされて、私は、普段行っておりますスーパーで九州特産の品々を箱詰めしてお送りすることにしました。どういうものかというと、柚子こしょう、フンドーキンの味噌、黒糖、棒がたラーメン、地物の麦焼酎、などです。どれも関西の品とは一味違ったもので、九州の香りをお届けすることが出来る品々でした。それに、聖句を交えた手紙を添えて送れば完璧です。

　皆さんこの贈りものを、意外な感じで喜ばれたようです。甥たちからも喜びの返信がありました。今、思えば実際に出かけて、面倒な思いをするより良かったと思いました。

なぜ、このような話から始めたかといいますと、聖書が語る喜び、「喜びなさい」ということは、**今この時に**、ということであることを示したかったからです。今の世の中の状況では、私たちは「主よ、コロナ渦を終息させてください。そして私たちを喜び合えるようにして下さい」というような祈りを優先させがちですが、私たちはその前に、「主よ、**今ここで**私たちを共に喜ばせてください」と祈る必要があります。

１９０５年、明治３８年に発表されました、「山のあなた」という詩をご存じでしょうか。少なくとも私の年以上の方々は学校で学ばれてご存じのことと思います。この詩は発表されてから有名になって、広く知られてきました。カール・ブッセというドイツの詩人の歌を上田敏という学者さんが日本語にした訳しです。

山のあなたの空遠く

「さいはひ」住むと人のいふ。

ああ、われひとと、とめゆきて、

涙さしぐみ、かへりきぬ。

山のあなたになほ遠く

「さいはひ」住むと人のいふ。

この詩が、なぜ日本人の間で有名になったかといいますと、それはこの詩の抒情といいますかメンタリティが当時の日本人にピタッと当てはまったからだと思います。幸いを今、この時に求めるのではなく、遠く離れた場所に見出そうとして、幸せ探しの旅に出かける。そして案の定、その幸いは見つからなくて、なお遠い場所へと旅立ってゆく。

ひょっとすると、当時の日本人だけでなく今の私たちも、そのような幸せ探しの旅をし続けているのかも知れません。

今日読まれた招きの言葉には、「青草を求めたが得られず、疲れ果ててなお、追い立てられてゆく」とありましたが、これは食べるものにも事欠いた人々が、それを求めても得られなかったということを言っているわけではありません。

たとえ、満ち足りた生活をしていても、幸せを、今この時にではなく、外に求め始めると私たちは、必ず、疲れ果てて、何者かに追い立てられるようになるということを言っているのです。

それは今日の聖書箇所もそうですし、聖書は一貫してこのことを語っているのです。

一方で上田敏の「山のあなた」の世界に浸っていますと、何とも言えない慰めを味わうことがあるかも知れません。しかしそれは、聖書が語る慰めと救いとは全く違うものです。私たちはその両者の違いをしっかりとわきまえて区分していかなければなりません。

「山のあなた」が語る幸い住む場所とは、理想郷と言い換えることが出来るでしょう。理想という言葉は元々哲学用語ですが、戦前戦中戦後の日本社会を席捲しました。「理想の社会、理想国家、理想の家庭、理想の結婚」など、様々な理想が、私たちの先に設定されては、私たちは、それを追い求める者とされてきたのです。

パウロは、天にある本国、つまり新しいエルサレムを目指して走っています。しかし彼は、それを追い求めているのではありません。２０節に銘記されていますが、彼はそれを待っているのです。それがやってくるのを待っているのです。では、それを待ちながら、私たちがなすべきことは何か、それをパウロは今日の聖書箇所で述べているのです。

今日の聖書箇所を読むにあたって、ルカ福音書の１７章２０節からを見ておきましょう。新約聖書１４３ページになります。２１節に「実に、神の国はあなた方の間に在るのだ」とあります。この言葉は実に味わい深いです。神の国は私たちから遠いところにあるのではなく、今ここに、私たちの間に在るのです。或いは今ここに、実現する可能性があるのです。実にこのことを私たちはフィリピの信仰への手紙を講解していく中で何度も何度も知らされました。礼拝とは、今ここで、主を礼拝して賛美して共に喜ぶことであることを知らされました。悲しみが深ければ深いほど、今慰められる喜びは大きいのです。

パウロは神の国に至る道が、苦しみに満ちていることを承知しています。ですから、今日の聖書箇所で彼は、自分の歩みを、闘技場で戦う剣闘士のステージにたとえています。パウロの神の国へ向かう歩みは、自分自身が幸せを求めて近づいているのではなく、あくまでも神様の計画に従うステージなのです。ですからその道行きに災いがあるか、苦難があるか、或いは幸いがあるかといった事柄は、彼の歩みを進めるにあたって妨げにも、或いは動機にもならなかったのです。

そこら辺のことが、１４節に表現されています。「神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。」

賞を得る為、といわれますと、今の私たちはどうしてもオリンピックで賞を得るため、とかいう発想を連想してしまいますが、必ずしもそういうことをパウロは意図したのではないのではないでしょうか。この賞というののもとのギリシャ語をより忠実に訳せば、それは花輪、栄冠、冠ということになります。つまり「神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる冠を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。」つまり、私たちは、すぐ前に居られるキリスト・イエスにピタッとついて走り、その時が来れば、キリスト・イエスから、すぐに冠を授けられるようにいつも備えていなくてはなりません。この冠を授けられるということも、遠い場所での出来事ではないのです。今ここででも起こりうることなのです。

ここまでで、私たちは、神の国というのが、遠いかなたにある幸いの国というのではなく、実に、今ここにいる、私たちのの間に在るということを知らされました。ですから私たちはイエス様のすぐ後ろにピタッとくっついて、イエス様から冠を授けられる準備をしながら、ひたすら走り続けるべきである。これこそ１５節で言われる所の、完全な者の姿でありましょう。

しかし、パウロ自身、認めているように、自分自身も、その完全なものになっているわけでもないし、むしろ別な考えがあることを許容し歓迎しているようでもあります。私たちが抱く、別の考え、神はそのことをも明らかにして下さるとして、パウロは神にすべてを委ねています。１６節「いずれにせよ、わたしたちは到達したところに基づいて進むべきです。」

たとえ今の私たちが「青草を求めたが得られず、疲れ果ててなお、追い立てられてゆく」状況の中であえいでいたとしても、私たちはそのことをなかったことにする必要はありません。すべてが神様の前に明らかであるからです。そして私たちは到達したところに基づいて進むべきなのです。

そのうえで、パウロはより具体的な勧告を私たちに語っています。１７節「皆一緒にわたしにならう者になりなさい」といって、皆にパウロを模範とする様に勧めているのです。皆さん、お分かりかと思いますが、パウロは自分自身を誇ってるわけではありません。むしろ自分の不完全さを承知の上で、その破れをもみなに示したうえで、共に歩む者になろうとしているのです。１８節の、パウロが何度も涙ながらに言ってきた、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者とはどう者のことでしょう。今日の説教の流れからすれば、それは山のあなたの理想郷を追い求めていく者に他なりません。

実は明治期の説教者の中には、神の国自体を、そういった理想郷の一つとして考えて説教をした人たちが少なからずいました。今にして思えば大変に的外れなことであったと思わざるを得ませんが、私たちは、幸せを追い求めて、神の国を探し求めては、そこに決してはいることは出来ないのです。なぜならば、十字架を通してしかそこに入ることが出来ないからです。そのことをパウロはキリストの十字架に敵対して歩んでいる者と表現しているのです。ルカ福音書に戻りますと、新約聖書１４３ページになりますが、17章22節より、

「それから、イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたが、人の子の日を一日だけでも見たいと望む時が来る。しかし、見ることはできないだろう。『見よ、あそこだ』『見よ、ここだ』と人々は言うだろうが、出て行ってはならない。また、その人々の後を追いかけてもいけない。」とあります。

救いには教義があります。それは神の計画ともいえましょうし、それは一つの原理なのです。ですから、私たちはその教義というのがどういうことなのかを、心して学んでいく必要があるのです。

 03章 21節「キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。」とありますが、キリストによって冠を授けられた私たちは、まことに体と心でもって、キリストの喜びに浸ることが出来るようになるかも知れません。その喜びは、私たちが追い求めて得られる喜びをはるかに凌駕する、思いもよらない喜びであることでしょう。

ヨハネ黙示録に黙示されております、神の国、新しいエルサレムは、私たちが自分たちの幸せを追い求めて到達できる場所ではありません。ヨハネ黙示録を読んでも、新しいエルサレムは幸せなところである、というようには記されてはおりません。ではどういう風に幸いを記しているかといいますと、「この預言の言葉を朗読する人と、これを聞いて、中に記されたことを守る人たちとは幸いである」というように記されています。つまり新しいエルサレムにおいても、聖書を朗読し、それを守る人が幸いなのです。その姿は今の世を歩んでいます私たちと同じなのではないでしょうか。私たちが今この時にひたすら走っているこの道はそのゴールに至るまで、キリストと共にその喜びと幸いとがもたらされる道なのです。

お祈りいたします

天の父なる神様、この主日にこの兄弟姉妹たちを御前に集めて下さり共にあなたを礼拝賛美出来ます幸に感謝いたします。

今終戦の時を思い起こします。私たちがずっと追い求めて来た幸いが、どこにあるのかをあなたは確かに指し示し、又私たちと共に歩んでいてくださいます。どうか私たちがその恵みに感謝しつつ、感謝と賛美をもって、あなたの後ろをついて行くことが出来ますように。

今、ここにこそ分かち合うべき喜びかあることを私たちに悟らせ、それを遠くの理想に求めることがないように私たちを祝福しお守りください。今ここにあなたの十字架をへりくだって見上げることが出来ますことに感謝し、賛美致します。

今の世の中では、隣人との間に見えない隔ての壁が築かれつつありますが、どうか私たちを聖霊で満たし、本国に至る迄、一つの喜びで満たして下さい、たとえ離れて暮らしていましても、私たちが代わることなくあなたの喜びで満たされますように。

父と聖霊と共に一体であって代々に生き支配しておられます私たちの救い主イエス・キリストのみ名によってお願いいたします。